

聖なる場としての国家領域

－「神国」の表象－

千田 稔

国際日本文化研究センター

0 はじめに

小論では、「神国」としての日本の地図的表象についての問題提起を試みる。ある「国家」を「神国」とよぶとき、その国は全体として聖なる場のイメージをもつが、その聖なる根源を何に求めているかを問わねばならない。わが国を「神国」とよぶための論拠には二つの方向性が用意されてきた。一つ天皇を神と位置づけ、その統治する国とみなすものであり、他は、国土のすべてが神明によって護られているとするものである。だから「神国」の「国」が近代的転換をはかるまでは、「国」の意味は「国家」よりも「国土」であったことは容易に認めることができる。

前者と後者がどちらに「神国」の第一義的な意味があるかは、歴史的な時代状況によって異なるが、本来の「神国」意識は後者、つまり神明加護の国という意味に由来すると考えられる。なぜならば、歴史的状況の中で「神国」意識が高揚するのは異国との対立関係から国土を護ることに注意が向けられ、国土は「神明擁護」されるべき土地空間であったからにはかならないからだ。

「神国」の地図的表象がこれらのうちどちらに基づくかは後に検討するところであるが、とりあえずは「神国」意識の歴史の変遷を既往の研究によって概観することにしたい。

1 古代の天皇と神

古代に天皇が神として位置づけられたことは、すでに指摘されてきたし、その神としての表象は飛鳥時代の八角形墳にみられることなどは筆者らが論じてきたので、多くをここで再説することは不要である¹。しかし、概略的に述べておかねばならないことは、天皇という称号が中国の土着的な宗教に起源する道教の最高神「天皇大帝」に由来することであり、それゆえにこそ、天皇は神であった、というよりは神格化がはかられたというべきであろう²。だからここにいう天皇＝神は宇宙王という存在であった。そのことを指示する史料としては、万葉歌のいくつかをあげるだけで十分であろう。

やすみしし わご大君 神ながら 神さびせすと 吉野川 ^{たぎ}激つ河内に 高殿を
高知りまして 登り立ち 国見をせせば 畳づく 青垣山 ^{みつき}山神の 奉る御調と 春べは
花かざし持ち 秋立てば ^{もみち}黄葉かざせり(一に云ふ、黄葉かざし) 逝き副ふ 川の神も
大御食に ^{おほみけ}仕へ奉ると 上つ瀬に 鵜川を立ち 下つ瀬に ^{きで}小網さし渡す 山川も 依りて
仕ふる 神の御代かも(巻1-38)

大君は 神にしませば 赤駒の 腹ばふ田居を 都となしつ(巻19-4260)

だが、天皇＝神であった時代、上にあげた歌に即していうならば、天武・持統朝にその国が「神国」とよばれたことを示す史料は見あたらない。もちろん後にあげる『日本書紀』神功皇后紀には「神国」という表現があるが、これが、天武・持統朝に「神国」という呼び方があったということを保証するものではない。ただ、天皇の治める「国」という意識はあったことは、次の万葉歌からしることができる。

天皇の 敷きます国の 天の下 四方の道には 馬の蹄 ^{つめ} い盡す極み 船の舳の ^{つく} い泊つる
 までに ^{いにしへ} 古よ 今の現に ^{をっつ} 萬調 ^{よろづつき} 奉る最上と ^{まつ} 作りたる ^{つかさ} その農を ^{なりはひ} 雨降らず 日の
 重なれば 植ゑし田も 蒔きし畠も 朝ごとに 凋み枯れ行く そを見れば 心を痛み 緑
 児の 乳乞ふがごとく 天つ水 仰ぎてそ待つ あしひきの 山のたをりに この見ゆる
 天の白雲 海神の 沖つ宮辺に 立ち渡り との曇り合ひて 雨も賜はね (巻18-4122)

この万葉歌によまれている「天皇の敷きます国」の「国」は、いわゆる律令国家の「国家」的意識という制度的国家ではなく、天皇が治める「国土」という意味にとる方が分かりやすい。歌の別の表現によれば「天下四方」こそが「国土」であるが、その「国土」が日照りのために雨を乞う歌であり、それを乞う相手は「沖つ宮辺の海神」ではあるが、「神明加護」の国であるから、あるいは天皇の国であるから、干ばつから護られるという意識はすくなくともこの歌にはよまれている。

2 正史にみる「神国」

『日本書紀』の神功皇后摂政前紀に新羅王の言葉として「吾聞く、東の方に神国有り。日本と謂ふ。亦聖王有り。天皇と謂ふ。必ず其の国の神兵ならむ。豈兵を挙げて拒ぐべけむや」とあるのが、「神国」の正史における初出である。ここにいう「神国」は神明加護の国の意味にとってよく、「神兵」の用法も天皇とは直接結びつかない。

「神国」ということばが上記の『日本書紀』の後、正史にあらわれるのは『日本三代実録』貞観11年(869)12月条である。

伝へ聞く、彼の新羅人は、我が日本の国と久しき世時より相ひ ^{あなひ} 敵ひ来たり。而るに今境内 ^{くにうち}
 に入り来たりて、調物を奪ひ取りて、懼れ ^{はばかる} 沮る ^{こころ} 気無し。其の意況を量るに、 ^{こころばへ} 兵寇の萌 ^{いくさ} ^{きざし}
 此よりして生るか。我が朝久しく軍旅なく、専ら警備を ^{いましめ} 忘れてたり。兵乱の事、尤も慎み恐る
 べし。然れども我が日本の朝は所謂神明之国なり。神明の助け護り賜はば、何の兵寇が近き
 来るべき。況むや掛けまくも ^{かしこ} 畏き皇太神は、我が朝の大祖と ^{おほしま} 御座して、 ^{おすくに} 食国の天の下を照
 らし賜ひ護り賜へり。然れば則ち他国異類の侮り加へ乱を致すべき事を、何ぞ聞こし食して
 警め賜ひ拒ぎ却け賜はず在らむ。……この状を平けく聞こし召して、 ^{ときよ} 仮令時世の禍乱として、 ^{みだり}

上の件の寇賊^{あた}の事在るべき物なりとも、掛けまくも長き皇太神、国内の諸神達^{いざな}をも唱^いひ導^いき賜^いひて、未だ発^いで向たざる前に沮^い拒^いぎ、排^い却^いけ賜^いへ。若し賊^いの謀^い已^いに熟^いりて、兵船必^いず来^いべく在らば、境内に入れ賜^いはずして、逐^いひ還^いし漂^いひ没^いれしめ賜^いひて、我が朝の神国と畏^いれ憚^いかられ来たれる故実^いを澆^いし失^いひ賜^いうな。……

上記の記事は新羅の海賊船二艘が筑前国那珂郡荒津に来て、豊前国の貢調船に積まれていた絹綿を略奪したことなどの災いに際して使者を伊勢大神宮に派遣したときの告文の一部である。これには明らかに「神国」は伊勢の皇太神と国内諸神との加護によって新羅の海賊の追討をし、日本が「神国」であるという故実を固持することを念じている。だから「神国」たる根拠は伊勢神宮であると同時にこの時点で「神国」ということが故実になっていたというのであるから、「神国」という国土観はかなり以前からあったと考えることができる。

正史には以上の2件以外に「神国」という表現はみられないが、両者に共通するのは、日本と新羅との関係において日本を「神国」とみなしている点である。さらにその内容においても、日本が「神国」であるため、新羅に恐れられ、あるいは「神国」であるから海賊から護られるのだという点においても、新羅と敵対する状況の中で、「神国」という意識が浮上していることに注意すべきであろう。とはいえ、神功皇后紀は伝説などによって構成された虚構であるから、史実としての意味はないことはいうまでもない。ところが、伝説的物語に「神国」が新羅と対峙する関係ででてくることは、対新羅関係において日本は自国を「神国」として表現することが慣例化していたとも考えることができる。

3 中世の「神国」意識

田村圓澄が指摘するところから従えば、「神国」の強調は、国内的に、常に政治的危機・社会的不安と関係し、為政者は自己の政治権力の源泉を神の計らいに求めたのだが、摂関政治の時代には政治的社会的な安定期であったため、為政者は「神国」思想の高調を必ずしも必要としなかったという³。

「神国」意識が高揚するのは周知のように元寇においてである。文永7年(1270)菅原長成によって起草された蒙古に対する返牒には「凡そ天照大神、天統を輝してより、日本今皇帝日嗣を受けたまふにいたるまで、聖明のおよぶところ、属せざるなく、左廟右稷の靈、得一無二の盟、百王の鎮護孔昭たり、四夷の脩靖紊るなし、故に皇土を以て永く神国と号す」とある。この表現による限り、「神国」は「皇土」つまり天皇の領土であるとする。ただこの場合は蒙古国の皇帝に対して書かれたものであるという点からみれば、天皇を前面に出さねばならない必然性があった。一方、『倭姫命世記』には、「吾聞く、『大日本国は神国なり。神明の加被^こに依りて、国家の安全を得。国家の尊崇に依りて、神明の靈威を増す』。肆に神を祭るの礼、神主・祝部^{はふりべ}を以てその齋^{まつ}り主と為す。茲に因りて、大若子命^{おほわかごのみこと}・弟若子命^{おとわかごのみこと}、ともに殿の内に侍り、善く防ぎ護ることを為して、国家を祈り奉^{あまつりつぎ}れらば、宝祚^{たま}の隆へむこと、当^{まさ}に天壤^{あめつち}とともに窮^きり無^あかるべし。また聞く、『それ悉地は則ち心より生ず。意は則ち信心より顕る。神明の利益を蒙^{かがふ}る事は、信力の厚薄

に依る』となり。天の下の四方の国の^{おほみたらち}人夫等に至まで、齋き敬ひ奉れ。」とある。

『倭姫命世記』の成立は建治(1275-1278)から弘安(1278-1288)で元寇の時期に一致することから和田嘉寿男は、『倭姫命世記』は元寇に合わせて書かれたのではないかともいう⁴。

その後、「神国」論を説く代表的な著作は北畠親房(1293-1354)の『神皇正統記』である。「大日本は神国也。天祖ははじめて基をひらき、日神ながく統を伝給ふ。我国のみ此事あり。異朝には其たぐひなし。此故に神国と云ふ也。……震旦広しと云へども五天(竺)にならぶれば一辺の小国なり。日本は彼土をはなれて海中にあり。……されば此国は天竺よりも震旦よりも東北の大海の中にあり。別州にして神明の皇統を伝給へる国也。」とある。「天祖」とは同書に「ここに天祖国常立尊、伊弉諾伊弉冉の二神に勅して給はく……」とあって「クニノトコタチノミコト」を指している。したがって「クニノトコタチノミコト」とアマテラスと天皇が「神国」を構成していると理解でき、かつ書名に「神皇」ということばを使っていることから天皇=神とみなしている。

『神皇正統記』が中世の「神国」論の中で異なる位置にあるのは、異国に対しての敵対関係から生じた単純な国土の「神明擁護」に論を発しているのではない。本書は天皇の絶対的権威を主張する立場で書かれたものであるから、「神明の皇統」は後醍醐天皇こそ正統な継承者であることをいうのであって、ここにいう「神国」は、究極的には日神の系譜を継いだ天皇の国のことでなければならない。

このように、中世の「神国」意識は二つの潮流があることが知られる。しかし、この二つの潮流がまったく異なる源から流出したものでないことは、いうまでもなく明らかである。つまりその本源はアマテラスを共有する。それだからこそ『神皇正統記』は「我国は神国なれば、天照大神の御計にまかせられたるにや」と記す。その点において先に論じた天皇=神とする古代の天皇の位置づけとは異なることは確認しておかねばならない。しかし、『神皇正統記』の日本を天竺や震旦とは異なる「別州」と見なしている点において、国家としての「神国」よりも国土を「神国」としてとらえていることは、すでに指摘されている。そのことにおいて「神国」論は地理的空間論と関連する。

豊臣秀吉の文禄・慶長の役(1521-1598)にも神国意識がみられる。

秀吉の最終目標は勢力が低下しつつある明を討つことにあったが、明との攻撃と朝鮮軍の反撃に会い、和議に臨むことになった。偽りの明使節を肥前国名護屋に迎え、和議条件と「大明勅使に告報すべき条目」を差し出した。そこには(一)日本は神国であり、秀吉は日輪の子で、秀吉の天下統一は天命であること、(二)秀吉は海賊取締令によって海路を平穩にしたのに、明が謝詞を示さなかったのは、日本を小国と侮ったもので、それ故に明を征しようと兵を起こしたことなどが記されていた。秀吉の場合「神国」は元寇の異敵調伏を祈祷する神祇信仰の延長線上にあるものであろう。

近世の国学の基礎となり、幕末の攘夷のために鼓吹された神国思想が、近代には天皇と国家神道による神国意識を国民に植え付けていった。そこには、天皇を神とする歴史的根拠を不透明にしたまま「神国」がつくられていった。近代の「神国」の虚構性を根底から問えなかった理由がここにある。

4 「神国」の表象空間

「神国」という認識の基盤が国家という抽象的概念ではなく、国土であるならば、実際には国土のイメージが図化される過程において「神国」が表象されることは想定できる範囲にある。

日本という国号が成立した以降のことであるが、国土の図として今日に伝わるのは、よく知られた「行基図」(「行基式日本図」という呼び方もあるが、ここでは便宜的に「行基図」という名称を用いる)である。「行基図」の一般的な理解は、応地利明のことは借りると「行基(668-749)の活動を示す伝承は、西日本を中心にいまも各地に残っている。その多くは、溜め池や橋梁の建設者としての彼の事績を伝えるものである。つまり高僧にして土木工事の指導者でもあった行基の事績が、伝承として語りつがれているのである。土木工事には、測量が不可欠である。そこから測量ともむすびつく地図の作成が、行基と関連づけて語られるに至ったのである」⁵というもので、「行基図」そのものを行基の制作とみないことはもとより、奈良時代に遡らせることはありえないとする。

確かに、現存する「行基図」の筆写年代などによるかぎり、上のような理解にとどめておくのが史料的には正当であることはいうまでもない。とはいえ、現存する「行基図」の原図にあたるものが奈良時代になかったとは言い切れない。この点については、筆者は仁和寺蔵の「行基図」(後掲)に「平城京」に関わる表現があることから、「行基図」は上に紹介したような通説的理解に検討を要するという問題提起をした⁶。

以下、「行基図」の主なるものの表現と「神国」表象との関係を見ていくことになるが、地図学史の細部の描画や記述には必要としないかぎり触れない。

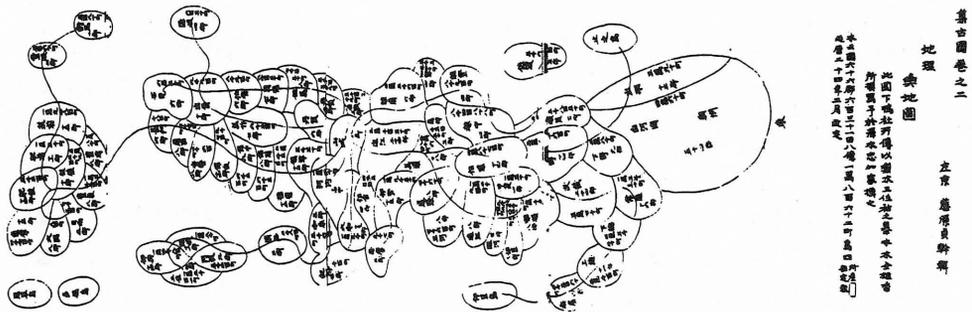
(1)「延暦二十四年輿地図」(図1)

延暦二十四年(805)の原図は失われ、江戸時代の写図として藤貞幹による『集古図』に収録されているものと内閣文庫蔵がある。いずれも京都下鴨社所伝の図を写したものであるが、下鴨図は現存しない。「延暦二十四年」という年号が記載されていることによって「日本図として最古の図形を示すもの」という位置づけは正しくない。なぜならば、すでに述べたように現存「行基図」の作成年代が明示されていたとしても、それが依拠した原図の存在を想定すれば、いずれが「最古の図形」であるといえるのかという判断は容易になしえないからである。

本図は「行基図」の一つの典型とでもいうべきもので、諸国が曲線状の輪郭で区画され、京都を中心とする官道などの交通路が描かれ、かつ、国々の名、郡の数、田の町数が記入されている。したがって「神国」との関連で何も言及できる表現がないといえ、それまでである。しかし、いささか、注意を引くのは、本図の諸国名などの記載が西を上にして縦書きで東に向かって書かれている点である。つまり、現存写図の「右方」に書かれているとされる「輿地図……」の伝来に関する記述の向きは北-南であるのに対し、図中の書き込みは西-東であって、もともと本図の原図は地図の東の方(下)から西の方(上)を見るように描かれたものであると思われる。ということは、原図において東こそ優位の位置であったことを示す。そのような地図の表現に

ついてあえて、解釈できる余地があるとすれば次のようなことになる。

『日本書紀』成務天皇五年条に「因りて東西を日縦とし、南北を日横とす」とあるが、「太陽の動き」を基準として、東西を「タテ」、南北を「ヨコ」とみなしたと解することができる。これは後世南北を「タテ」、東西を「ヨコ」としたことと異なる方位観である。古来、日本語において「タテ」は「ヨコ」に対して優位な方位であることは、かつて筆者が論じた⁷⁾ので、ここで再論の要はない。ただその際に、神の座を東に配して、人は西から拝むということが原初的な神社の配置であったことを述べた。もし「延暦二十四年輿地図」が、神社に奉納されるべきものであれば、地図の下部が神の座の方に向けられることは考え得ることである。なぜそのような想像をたくましくするかといえば、本図が下鴨社所伝図の写本とされるからである。もとより上の想定を支える根拠は薄弱といわねばならないが、国土を表現した地図が神社に伝わるといふことに、国土の「神国」的性格をわずかにではあるがうかがうことができる。

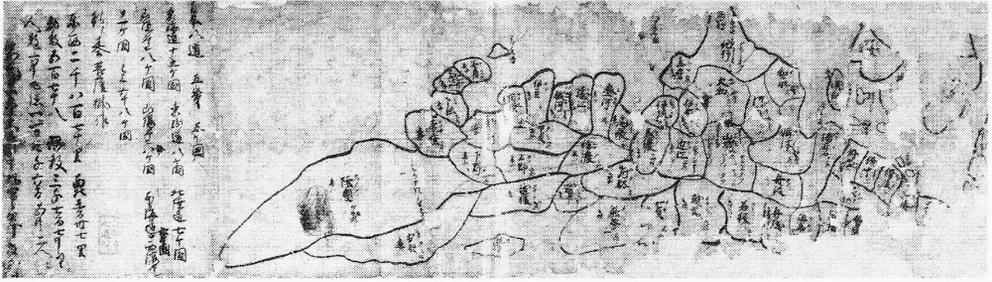


(図1)「延暦二十四年輿地図」

(2)「仁和寺藏日本図」(図2)

地図の左方に「嘉元三年大呂謝寒風写之不可及外見(大呂(十二月)、寒風をことわってこれを写す、外見に及ぶべからず)」とある。嘉元三年(1305)に筆写されたもので、実物の現存する最古の地図である。先にふれたように、本図の原図が奈良時代に遡る可能性を示唆するのは、山城と大和の国境付近に四角形が描かれ、二字のうち下の文字が「城」とよみとれることである。上の文字が「平」ならば「平城」であり「王」ならば、「王城」であって、地図上の位置的には平城京である可能性が高いという解釈による。しかし、ここでは「行基図」の年代論は主要な論点ではない。

本図の表現からも「神国」的意識を明示的に引き出すことはできない。しかし、「延暦二十四年輿地図」で試考した方位論の観点は一応本図においても注意しておきたい。本図は南が上にして描かれている。諸国名は上から下に、つまり南から北に縦書きを原則としている。「延暦二十四年図」で想定したように、地図を見る立場の者が地図の下側に座すとすれば、その人物は北から南を眺めるという体を取りながら地図をみることになる。そのような人物を意識して国土の地図が描かれたとしたら、その人物の候補の一人として、宮で南面して座する天皇をあげることができよう。たんなる地図の方位表現から想定するにすぎないが、本図の原図が天皇に差し出されたものならば、その地図の表現の意味は「天皇＝神」の国土を表現したということも想像できよう。



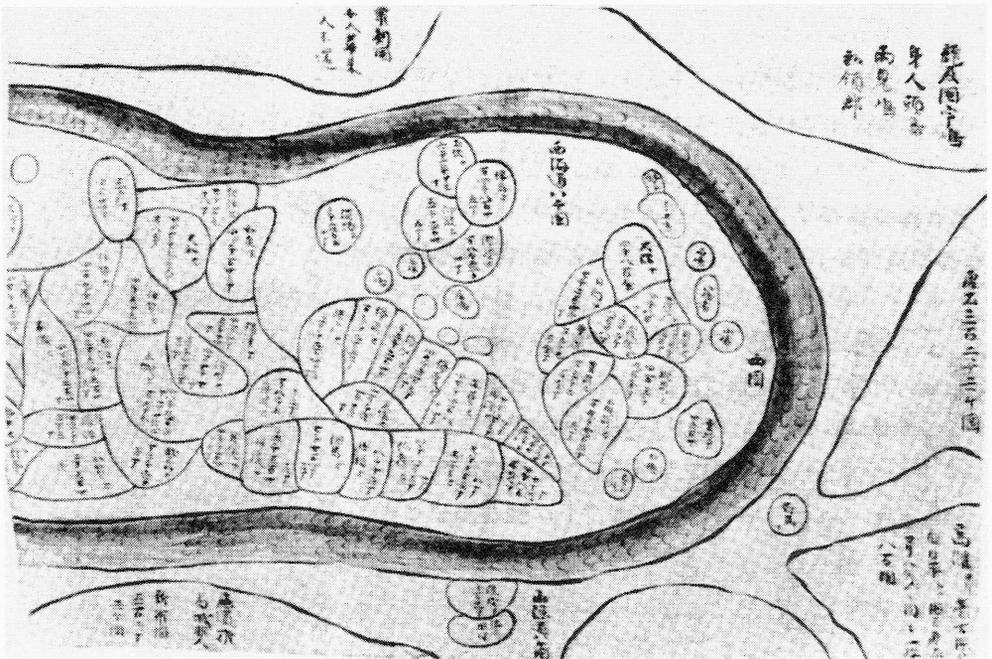
(図2) 仁和寺蔵日本図

(3)「金沢文庫蔵日本図」(図3)

本図も、南を上にしてしている点では「仁和寺日本図」と共通し、制作年代も嘉元三年と推定されているが制作年次そのものが書かれていないので、正確には明らかではない。

本図の特色は日本の外の海に竜を描き、それでもって日本の国土を囲んでいることである。この種の日本図は現存の「行基図」やその後の日本図にも見られない。ただ、本図は日本の西半だけが残ったもので、他の半分は現存しない。なぜ龍でもって日本の国土が囲まれて表現されたかは、今までのところ的確な解釈は得られていない。筆者もそれに対する明快な説明を持ち合わせているわけではない。ただ、田村圓澄が引く『義楚六帖』(巻二十一)に日本について「彼国古今、侵奪なし、龍神報護す」とあることとの関連を思い起こさせる。

龍によって国土が囲繞されていることとともに、本図の特色は海外の地域を描いている点にある。それらについて解釈を試みておきたい。



(図3) 金沢文庫蔵日本図

①地図の下部(北)左方 描かれた陸地の一部に、「新羅国五百六十六ヶ国」と「雁道 雖有城非人」という書き込みがある。おそらくこの書き込みが本図の本質を表しているにとらえることもできる。14世紀の時点において新羅という国はなく、朝鮮半島は高麗国の時代である。それにもかかわらず、新羅国の表記があることはなぜだろうか。それについての一つの試案をあげるとすれば、すでに引用した古代に作られた正史における「神国」のコンテキストである。『日本書紀』、『日本三代実録』いずれも日本を「神国」とする位置づけは新羅に対する敵対関係がもたらしたものである。それゆえに、新羅が本図の海外に当時存在しないにもかかわらず表記されていることが、この地図の「神国」表象であるといえる。新羅を海外に描くことが日本の国土の「神国」表現を保証するものであった。

「雁道 雖有城非人」の表記とともに「雁道」の意味そのものを解明することは、日本地図学史の難題とされてきたものであった。「雁道」は本図だけではなく、「混一疆理歴代国都之図」、「海東諸国記日本図」や「日本一鑑」の日本図やその後の「行基図」にも描かれた位置は異なるとしても描画されている。

近年、応地利明は『今昔物語』にその「雁道」の典故を求めることを試みた。それは巻三第十一話「釈種・龍王の婿と成れる語」の説話から「雁道」の説明ができるとした⁹。ここで、その内容について詳細に紹介する余裕がないが、筆者も応地の説に従いたい。むしろ本論にとって意味をもつのは、「雁道」が「城が有ると雖も人に非ず」という異類の住む空間であるとして、龍で囲まれた国土の外に配されていることである。なせならば、今一度『日本三代実録』の記事を思い起こすと、「他国異類」と対立する状況によって「神国」日本が呼び起こされるからである。したがって、国土の外に「他国異類」が配された地図そのものが「神国」を表象しているといつてよい。上に記したように「新羅」と「雁道」を海外に描画しただけでも、「神国」と対立する要素となりうるのである。

②本図の上部左方、龍で囲まれた国土の外側にやはり陸地の一部が描かれそこに「羅刹国 女人華来 人不還」と書かれている。これについては、すでに秋岡武次郎が『今昔物語』巻五第一話「僧迦羅・五百の商人、共に羅刹国に至れる語」の内容と対応することを指摘している¹⁰。ついでに「羅刹」の意味は「食人鬼」という仏教語Raksasaに由来するという。「羅刹」の描画と書き込みからも「異国他類」を海外の空間に配したことが知られよう。

③本図右方の上(南西隅)、やはり国土を囲む龍の外側に陸地の部分を描き、そこに「龍及国宇嶋 身人頭鳥 雨見嶋 私領郡」と書かれている。「龍及」は「琉球」のことで「宇嶋」は黒田日出男は「大嶋」のことで「龍及国宇嶋」は「琉球国大嶋」をいうとする¹¹。そこに、いつの時代の地理的認識か定かにできないが、「身人頭鳥」つまり身体は人間であるが頭は鳥のようなものが住んでいたという。すでに14世紀には琉球の実態は本土においてよく知られていたのであるにもかかわらず、「異類」的表現を地図に留めているのは、かなりの年代を遡る伝承が少なくとも地図的空間に伝えられてきたのであろう。「雨見嶋」は「奄美島」を指すことはいうまでもないが、「私領郡」は、僻遠の地にあって私的支配がなされていたという意味であろうか。

④さらに本図の右端(西側)には「唐土三百六十六ヶ国」と書かれ、その下の隅に(北西部)「高麗ヨリ蒙古国自白平トヨ国云唐土ヨリハ多々国々一称八百国」とある。「唐土三百六十六ヶ国」は

中国のことを指しているとする以外にない。次の書き込みについては一貫した意味がとらえにくい。おそらく「高麗」と「蒙古」という国が海外にあったことが地理的情報として知られていたということは想定できるが「自白平トヨ国云」は解することができない。ただ、秋岡が「本図が朝鮮、唐土、蒙古を描くとともに蒙古襲来の激戦地であったシカノ嶋、竹嶋等を記す現存する最古の日本図であって、蒙古来襲後の作らしく想わしめる」と読みとっているように、元寇と関連する日本図であるらしい。その地図に「他国異類」を表現することは、まさしく、本土の「神国」認識の地図的表現であることは認めてよいであろう。

「他国異類」と神の関係は中世に始まったわけではない。『日本書紀』欽明天皇五年十二月条に、佐渡島に上陸した肅慎人にまつわる伝承が書かれている。

越国言さく、「佐渡嶋の北の御名部の碕岸に、肅慎人有りて、一船舶乗りて淹留る。春夏捕魚して食に充つ。彼の嶋の人、人に非ずと言す。亦鬼魅なりと言して、敢て近つかず。嶋の東の禹武邑の人、椎子を採拾ひて熟し喫まむと為欲ふ。灰の裏に着きて炮りつ。其の皮甲、二人に化成りて、火の上に飛び騰ること一尺余許。時を経て相闘ふ。邑の人深く異しと以為ひて、庭に取置く。亦前の如くに飛びて、相闘ふこと已まず。人有りて占へて云はく、「是の邑の人、必ず魅鬼の為に迷惑はされむ」といふ。久にあらずして言ふことの如く、其に抄掠められる。是に肅慎人、瀬波河浦に移りて就く。浦の神嚴忌し。人敢て近つかず。渴ゑて其の水を飲みて、死ぬる者半に且す。骨、嚴岫に積みたり。俗、肅慎隈と呼ぶ」とまうす。

肅慎人を人にあらずと言ひ、鬼として佐渡の人は遠ざけ、浦の神の靈威によって死ぬという物語は、神が「他国異類」を放擲することであり、この場合は地方での出来事として語られているが、それが国土のレベルになれば「神国」と「他国異類」との関係となる。いずれにしても「神明加護」という点で共通する。

(4)「拾芥抄の大日本国図」(図4)

『拾芥抄』は洞院公賢(正応4年(1291)－延文5年(1360))の撰で、曾孫実熙の増補と伝えるが慶長(1596-1615)版以前の写本には日本図が収められていない。ここでは寛永版をとりあげてみよう。日本図に関する基本的な表現は、これまでとりあげてきたものと、異ならない。本図で注意されてきたのは、左上部に「大日本国図は行基菩薩の図する所なり。この土の形、独鈷のごとし。よって仏法滋く盛んなり。その形、宝形のごとし。ゆえに金銀銅鉄等の珍宝あり。五穀豊稔なり……」と書かれている。

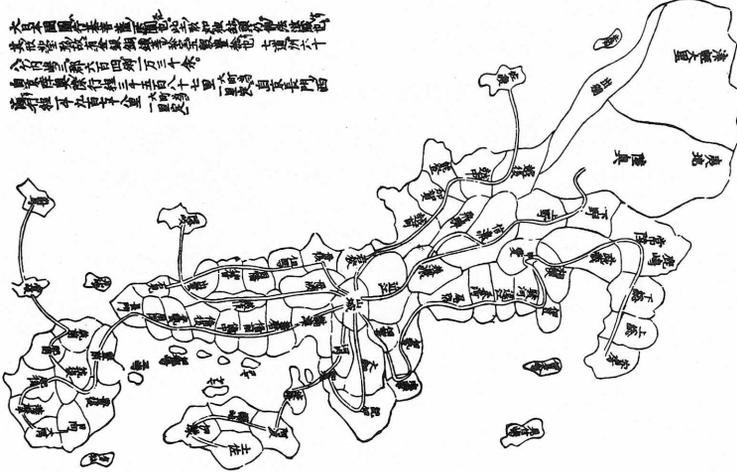
本図は行基菩薩の作であって、国土の形が独鈷の形であるという。独鈷は金剛杵ともよばれ、密教の法具で、煩惱を破る悟りの智恵の象徴として採り入れられた。国土が、独鈷の形であるという言説から「行基図」の新しい解釈が黒田日出男によって提示された¹²⁾。

黒田は天台教学の書『溪嵐拾葉集』(著者は天台宗の記家光宗(1276-1350))。文保2年の自序)

に引かれている『行基菩薩記』に「問ふ、我国をもつて独鉗の形と習ふは如何。答ふ、行基菩薩の記に云く、日本はそれ独鉗と云へり。謂ふ意は、行基菩薩、日本を遍歴して、国境を定め、田畠を開きたまふ。その時、十人の作るべき田は十人に変じて雇はれ、乃至百人の作るべき田には百人に変じて雇はる。かくのごとく変作して、我国の田畠をば、開きたまへり。その時感見の様片、図し給へり。その形が形なりと云々」といった記事に注目し、『行基菩薩記』という書は未発見ではあるが、「行基図」の成立の背景になった物語であることはほぼ確実であると述べた。

黒田の所説は、いわゆる「行基図」がその制作者を行基に仮託した経緯に関するもので、「行基図」研究に新しい光りをあてた点において大いに注目すべきであろう。しかし、『溪嵐拾葉集』が引く『行基菩薩記』の記述でもって「行基図」のもっている意味のすべてを解釈できるであろうか。一つの疑問は、国土が独鉗の形であるという認識は、描かれた国土の地図が存在することによって、その国土の形の描画から導かれたものとみるのが、現実的である。国土の形の描画が行基その人か、あるいは同時代の誰かによってなされたであろうかは明らかではないが、行基によって制作されたという伝承が語り継がれ、その国土の形の描画を意図的に独鉗の形とみることによって、『行基菩薩記』にいうような物語が生まれたという方が、日本図の伝承過程として理解しやすい。日本図に国土の形が「独鉗のごとし」と書かれた『拾芥抄』収録地図は密教的日本国土観を表現したと認識されたものであったとしても、例えば「延暦二十四年輿地図」と称される原図があったとしたら、その日本図は国土の形がその当時において独鉗と認識されていたとは考えがたい。

しかし、ここでは、国土の形を独鉗とみなした状況があったことは否定できないという点に注意を払わねばならない。再び黒田日出男の論考を参照するが、先に引いた『溪嵐拾葉集』の『行基菩薩記』の文の後に独鉗の形そのものを日本図として描いた図が添えられている。独鉗を縦にし上に東、下に西と書かれ、右側に「南 伊勢海神明」、左側に「北 敦賀海気比 湖海山王」とある。まさしく独鉗をもって「神国」の国土を表現した日本図にはほかならない(図5)。しかしこの密教の法具の図形でもって「神国」を表現する契機は「行基図」を独鉗に類似する図形とみなしたことにあるのであって、もともと独鉗に国土の観念があったわけではない。「行基図」の密教的転換の過程をあとづける作業をする余裕はないが、密教の中に取り込まれていく「神国」観が「行基図」独鉗に見立てていったのであろう。密教のみならず中世仏教にあっては現世の国土は「神国」であらねばならなかった。黒田俊雄がいうように中世における「神国」意識は仏教において「現世の浄土」を語るものであった¹³。「行基図」に独鉗の形を見立てることは、中世仏教における「神国」の地図的認識ということが出来る。しかし、繰り返すが、そのことにのみ「行基図」の表象を収束させることはできない。



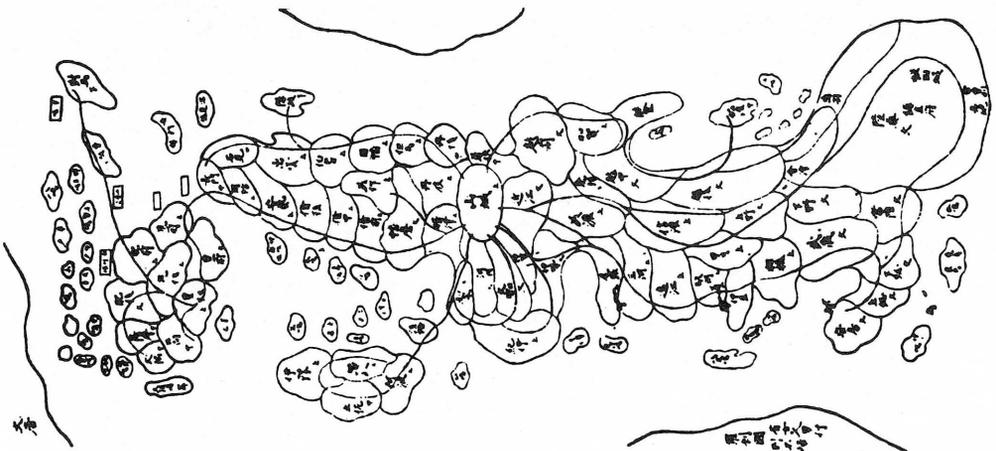
(図4)『拾芥抄』の大日本国図



(図5)

(5)「南瞻部州大日本正統図」(図6)

本図は唐招提寺に伝わる手書き日本図で弘治三年(1557)ごろの制作といわれる。本図は縦長で南(九州)を上にし、右に日本海側を配している。本図にも行基菩薩が描いたもので国土が独鈷の形をしたものという意味のことが記されている。内容の詳細についてここに記すまでもないが、「金沢文庫蔵日本図」のように龍に圍繞されてはいないが、周囲に「大唐」、「羅刹国」が描かれているが「雁道」の書き込みがないのは、筆写の際に落とされた可能性がある。この図によって独鈷の形とする認識と「他国異類」の表現の双方が組み合わせられ、「神国」としての地図描画がより強調されているといえる。



(図6)南瞻部州大日本正統図

以上に代表的な「行基図」から「神国」的表現を読みとって見た。ここで指摘したことをまとめてみると、①元寇などの危機的状况によって「神国」意識が高まることと呼応して地図の描画に「神国」的表現が見いだされ、②仏教的日本図に「神国」が表現されるのは、人が現世として生きる国土を「浄土」とみなすことと呼応する。いずれにしても、それは「聖なる場」であろうとした表現にはかならない。

小論では「行基図」にのみ焦点をあてて「神国」的表象を論じたが、より基本的な問題は「日本図」の作成史を通して、日本の国土観と、同時に外国の地図に描かれた日本から、外から見た日本観を読みとる試みであろう。

注

- 1 福山光司・千田 稔・高橋 徹『日本の道教遺跡』朝日新聞社 1987年。
- 2 福永光司『道教と日本文化』人文書院 1982年。
- 3 田村圓澄『神国思想の系譜』(『史淵』76、1957年)
- 4 和田嘉寿男『倭姫命世記注釈』和泉書院 2000年
- 5 応地利明『絵地図の世界像』岩波書店 1996年
- 6 千田 稔『行基図再考』(『地図と歴史空間』大明堂 2000年)
- 7 千田 稔『古代日本の歴史地理学的研究』岩波書店 1991年
- 8 田村圓澄(前掲3)
- 9 応地(前掲5)。黒田日出男『行基式(日本図とは何か)』(黒田日出男・メアリ・エリザベス・ベリ編『地図と絵図の政治文化史』東京大学出版会 2001年)において、「雁道」を「雁門」に求めて反論している。
- 10 秋岡武次郎『日本地図作成史』(『日本古地図集成』併録。鹿島研究所出版会1971年)
- 11 黒田日出男(前掲9)
- 12 黒田日出男(前掲9)
- 13 黒田俊雄『黒田俊雄著作集』(第4巻 神国思想と専修念仏) 法蔵館 1995年

[Abstract]

The Nation as Sacred Realm:
The Establishment of the Concept of the “Sacred Nation”

SENDA Minoru

International Research Center for Japanese Studies

(1) When a nation is called a “sacred country,” one tends to think of its entire territory as sacred space. Let us consider what the basis for this kind of thinking is.

One explanation states that the entire island of Japan was created and protected by the kami. If there was one simple definition for a sacred nation, it would not be difficult to analyze, but the relation between Shinto and the state is extremely complex. The fact that Japan was perceived as being sacred is related to the establishment of the imperial title ‘Tennou’. According to one theory, the Chinese Taoist supreme deity was the origin of the Japanese tenno. If one thinks that this accounts for the creation of the Japanese nation, it should explain how the titles for the Japanese emperor, nation and kami are all related. But over time, this triple relation was disregarded until it was eventually taken up.

In Empress Jingu’s account in the *Nihon Shoki*, the King of Silla stated that “I have heard that there is a sacred country in the East which is called Nihon. The virtuous ruler who reigns over this country is called the tenno.” This was the first instance in which the word “sacred country” appeared in the imperial history. Within the context of the *Nihon Shoki*, *shinkoku* could be interpreted as land of the gods. But it also seems to include connotation of the land of the emperor.

(2) The medieval text that directly discussed the concept of the sacred country was the *Jinno Shotoki* compiled by Kitabatake Chikafusa. “Japan is a sacred country. The creator laid down its foundation and the sun deity reigned over the land for ages. Our country is the only land that experienced this. That is why our land is called a sacred country. Although people say that China is a large country, when compared to India it is merely a small domain. Japan is in the middle of the ocean northeast of India and China. It is a land that is governed by the gods.” This text seems to link the emperor to Amaterasu. At the same time, since the title of the chapter is *Jinno*, it is possible to interpret the emperor as a kami.

(3) The notion of the sacred country can also be observed during Toyotomi Hideyoshi’s campaign against Korea. The ultimate goal of Hideyoshi had been to defeat the weakening Ming dynasty. But he encountered attacks both from China and Korea, so Hideyoshi had to eventually settle for a truce. When a false envoy from the Ming court arrived in Nagoya in Hizen (Fukuoka Prefecture), the Hideyoshi’s regime demanded a set of conditions that should be submitted to Ming court. (1) Japan is a sacred country and Hideyoshi is the son of the sun. His unification of Japan was pre-destined in the heavenly realm. (2) In accordance with the request to control pirates, Hideyoshi settled the sea routes. But the Ming court did not send any words expressing gratitude. The Hiyoshi regime felt that the Ming court looked down upon his regime, because Japan is a small country. For this reason, it is recorded that Hideyoshi sent troops to invade China. For Hideyoshi, the notion of a sacred country extended from the kami’s intervention during a national crisis such as

the time of the Mongal invasion during the thirteenth century.

(4) When national learning became the foundation for intellectual trends at the end of Edo period, anti-foreign sentiments were instigated and the Japanese emperor became the center of Shinto state. Over time people became indoctrinated with the idea that the emperor is a kami, and the notion of the sacred country developed with an ambiguous historical basis. That is why it was difficult to question the validity of the false notion of the sacred country in early modern times.